啓蒙の動物寓話における擬人化（1）

― レッシングとヴァイセによる描写比較

小　林　英起子

【キーワード】ドイツ文学、レッシング、ヴァイセ、啓蒙主義、動物寓話

序

寓話は啓蒙主義の時代、ドイツにおいて人気のある文学形式であった。ゴットホルト・エフライム・レッシング（1729-1781）も古代イソップ寓話にならって彼自身の寓話90話余りを３巻本にしている。それに先だってイギリスのサミュエル・リチャードソン（1689-1761）の240の寓話をドイツ語に翻訳し、そこから教訓（Lehre）と考察（Betrachtung）の形式を学んでいる。レッシングの場合、リチャードソンにあったような考察部分を取り去り、教訓もあえて圧縮し、ヴァイセに比較して表現が簡潔で明晰である。

レッシングとライプツィヒの学生時代に親交があった作家クリスチャン・フェリクス・ヴァイセ（1726-1804）は感傷的喜劇で成功を収めた作家だが、彼の寓話は動物描写の目線がもっぱら子供に向けられている。雑誌『子供の友』（„Der Kinderfreund“, 1776-1782）において、子供向けの物語や動物寓話を著している。これはドイツで最初の教育的雑誌とも位置付けられている。ヴァイセはドイツの農家の庭先にいるような身近な動物を擬人化して描き、度を越した欲深さや無知、嘘等の罪深い行為を、時には残酷な結末と戒めをもって教えてくれる。動物が命を落とすことで痛みを描写することもあるが、子供への語りかけは優しく、「ドイツ近代児童文学の父」と評価されるゆえんである。

レッシングの寓話では人間が動物を一方的に支配しているわけではない。動物も昆虫も人間の暮らしに自分達が役に立つかどうか、人間のあいだでの評判を気にしている。寓話の題材は多彩であり、ドイツ人に身近な動物、植物、昆虫等レパートリーも広範である。彼の場合、子供向けの寓話というよりも、同時代の文芸批評であり、外国の模倣に終わる詩人に対する辛辣な諷刺の色彩が濃い。

本稿ではレッシングの寓話における擬人化の特性を、彼が翻訳したリチャードソンの寓話描写や、同時代のヴァイセのそれと比較してみる。カラス、ヘビ、キツネ、オオカミ、メンドリ、ロバ、シカ等を例に、二人の作家の描写と意味の違い、導き出される教訓について検討する。そこからレッシングの寓話における世界観について考えてみたい。

Ⅰ　レッシングの寓話理論

レッシングは寓話に関する論文の中で、「寓話とは教えに富んだ不可思議なもの（das Wunderbare）である」というスイスの文芸理論家ブライティンガーの言葉を引用している。[1] レッシングは古代イソップやヨーロッパの寓話の研究から出発して、ラ・フォンテーヌ、サミュエル・リチャードソン、同時代のクリスチャン・フュルヒテゴット・ゲラートやクリスチャン・フェリクス・ヴァイセの寓話に触れて、自らの寓話をもっと魅力的で簡潔に表そうと意欲を見せていた。

啓蒙文化の中心地ライプツィヒの大学教授ゴットシェートは1730年、著書『ドイツ人のための批判的詩学の試み』における寓話論のテーゼ９の中で、

> Ich glaube derowegen, eine Fabel am besten zu beschreiben, wenn ich sage: sie sey die Erzählung einer unter gewissen Umständen möglichen, aber nicht wirklich vorgefallenen Begebenheit, darunter eine nützliche moralische Wahrheit verborgen liegt.
> 「そのため、次のように言えば、寓話を最もよく言い表していると思う。寓話はある種の状況下で可能な物語であるが、本当に起った出来事ではない。だがそこには役に立つ道徳的真実が隠されている。」[2]

と定義している。ゴットシェートはテーゼ10で、寓話を三種類に分類している。[3] すなわち、(1)法外な寓話、(2)信じられる寓話、(3)混合した寓話である。(1)のタイプは、理性的でない動物もしくは全く命をもたぬ物に、あたかもそれらが人間の理性を賦与されているかのように、話をさせたり振る舞わせているものである。(2)のタイプは、正真正銘の人間と他の理性ある動物が登場する、信じられる寓話のことをさす。(3)の混合した寓話は、一部は理性的でなく、一部は理性的な物が話をしたり、振る舞いながら現れるというものである。

寓話における動物の使用についてレッシングは、

> (...) fänden wir aber, daß die Tiere fast in allen Fabeln sprächen und urteilten, so würde diese Sonderbarkeit, so groß sie auch an und vor sich selbst wäre, doch gar bald nichts Sonderbares mehr für uns haben.
> 「ほとんどあらゆる寓話で動物が話したり、判断するということが分かってくれば、この特異性がそれ自体いかに大きくとも、じきにわれわれにとって珍奇なことでなくなるだろう。」[4]

と述べている。さらに彼は、寓話の目的について以下のように定義している。

Die Fabel hat unsere klare und lebendige Erkenntnis eines moralischen Satzes zur Absicht. Nichts verdunkelt unsere Erkenntnis mehr als die Leidenschaften. Folglich muß der Fabulist die Erregung der Leidenschaften so viel als möglich vermeiden. [5]

「寓話は、道徳的な命題を、われわれがはっきりと生き生きと知ることをねらいとしている。激情ほどわれわれの認識を曇らせるものはない。したがって寓話作家は、激情を起こすことなどできるだけ慎まなければならない。」

これについてレッシングは、「寓話が生まれる特別なケースは実際に想像してみなければならない。（中略）なぜか？現実であることは、単に可能なことよりも、生き生きとした確信をもたらすからである」と考えた。[6]

イソップの寓話は元来、文字によって書かれたものでなかったが、300余話が今に伝わっている。レッシングの寓話では第１部30話で唯一、カリカチュア化されたイソップが登場し、ロバと対話している。ロバはイソップに今度再び話に出てくる時には自分にもっと理性的で才気あることを言わせてくれと頼んでいる。イソップは、ロバが教訓家になってしまえば、自分の方こそロバになってしまったと他人に言われかねないと、おどけて反論してみせる。[7] こうした滑稽な描写は初期レッシングに見られる喜劇の基調とも通じるものがある。

レッシングの寓話はそもそもイソップの寓話を基にしたものだが、レッシングの寓話世界では、ギリシア時代への動物の願いの聞き役はギリシアの神々である。エルムによれば、ヴォルフ哲学の影響を受けた1730年のゴットシェートの理論書でも、1759年のレッシングの寓話作品でも、寓話は道徳の普遍的規範の「真実」を証明するものとして通っていた。「フランスのラ・フォンテーヌはイソップを凌駕した人物であり、ドイツのハーゲドルンはイソップとラ・フォンテーヌを凌駕した人物であり、レッシングはイソップ、ラ・フォンテーヌ、ハーゲドルンを凌駕したことになる」と称揚する。[8]レッシングはスイスのブライティンガーの文学理論とは距離を置こうとしていたが、当時の「不可思議なもの（das Wunderbare）」というブライティンガーの定義は、レッシングの寓話で見られる「話をしたり、考えたり、理性的に振舞う動物達」[9] にまさしくあてはまることになる。レッシングは自身の寓話の出版に先立って、サミュエル・リチャードソンのイソップ寓話のドイツ語訳を手がけていたが、この翻訳についてコープマンは、「過少評価はできない。レッシングはそれによって市民階級が解放される過程において直接欠かせないものを利用していた」[10]と説明している。

Ⅱ　レッシングの寓話における動物

レッシングの寓話は３巻本で、各巻30の簡潔な物語があり、合わせて90余りの話から成る。形式的にも注意深く計算されて構成されている。彼の寓話は単に道徳的であるだけでなく、英国や

フランス文学の模倣に終始するドイツの作家に対する辛辣な批判のこともある。各巻の冒頭には、寓話の前提となる奥深い森の描写（Ⅰ，1）や青銅の像（Ⅱ，1）であったり、弓を手に持った人間が登場する。（Ⅲ，1）また、各巻の終りには、イソップやミネルヴァ、あるいは羊飼いとナイチンゲールが出てきて締めくくりをしており、動物寓話に一定の枠構造を与えている。

ミネルヴァ、アポロ、ゼウス、復讐の神フリエ、商業神メルクリウス、ジュピター等が動物のそばにいて、彼らの悩みや願いに耳を傾けて、試練を与えたり、願いをかなえてやる。レッシングの寓話では人間が動物を一方的に支配しているわけではない。動物も昆虫も人間の暮らしに自分達が役に立つかどうか、人間の間での評判を気にしている。あるコオロギは人間の世界を「人間共和国」と巧みに名づけている。[11] レッシングの寓話世界では、人間の登場はギリシアの神々よりも少ないのが特徴である。それに対して、リチャードソンの寓話では、ギリシアの神の登場は比較的少なく、人間による動物の支配が特徴的である。

レッシングとリチャードソンの擬人化の違いは、「少年とヘビ」という寓話において顕著である。後者においては、少年が茂みの中で凍えたヘビを見つけ、胸元に入れて暖めてみた。だがヘビは温かくなるや、反応して、少年に噛み付き、それがもとでその子は命を落とす。[12] これに対してレッシングでは少年と飼い慣らされたヘビが対話している。リチャードソンのヘビは色模様があって、悪気があって人を噛んだのではなく、後で皮をはがされるのではないかと恐れての自己防衛だったと弁護してみせる。しかしながら少年は、恩知らずの行為を嘆き、これを聞いていた少年の父も両者に教え諭すのである。

> „Wahre Wohltäter, haben selten Undankbare verpflichtet; ja, ich will zur Ehre der Menschheit hoffen,－niemals.“ [13]
>
> 「本物の慈善家は、自らの行ないに恩知らずなまねをされたことはめったにない。人間の名誉のために ― 決してそんなことはないと願いたいよ。」

レッシングの寓話では２種類の生き物が互いをうらやましがる話がいくつか見られる。小さなスズメの方が至る所を飛ぶことができるので、大型のダチョウよりも良いとする。レッシングの場合、小さな生き物、弱い者を判官びいきする傾向も見られる。カラスとキツネの物語は、後者の甘言にカラスがそそのかされて鳴き声を披露する際に、口にくわえた肉を落としてしまう内容である。地上に落ちた肉には、実は毒が入っており、まんまと獲物をせしめたはずのキツネも、肉片の毒にあたって命を落としてしまう。甘い言葉をうのみにしたり、おべっかを使って利益を得たところで正義の前に裁きを受けるという教訓が込められている。

キツネとブドウの物語では、キツネは届かぬブドウの房を、「すっぱいブドウでしかないのだ」と自らを合理化して負け惜しみを言う。さらに、そのブドウの話をその頃脚光を浴び始めた

クロップシュトック（1724-1803）にたとえて、彼をねたんで軽視する批評家達を狐に見たてて、辛辣な比喩にしていることもレッシングの特徴である。レッシング自身、文芸批評ではできるだけ感情を高ぶらせないようにすべきだと考えていたにもかかわらず、文芸批評になると気持も高揚するかのようである。

レッシングの簡潔な寓話では、動物と人間の対話の後で、残酷な結末がくることもまれではない。老いたオオカミの話がその例である。老いて体力も落ちたあるオオカミは、一人目の羊飼いの家を訪ねては羊の分け前を交渉しに行く。断られるとオオカミは次の羊飼いには分け前の要求を下げていく。二人目の羊飼いには１年で６頭の羊を要求し、三人目の羊飼いには１年に１頭を、しまいには死んだ羊を分けるように交渉して歩く。オオカミはかつての獰猛さも衰えて、当然のことながら羊飼いに追い払われる。六人目の後、押し入った羊飼いの家で子供に襲い掛かるが、人間達により打ち殺されてしまうという話である。虫の良すぎるオオカミの申し出がことごとくはねのけられる７話連続物（Ⅲ，16-22）である。

> „Da sprach der Weiseste von ihnen: Wir taten doch wohl Unrecht, daß wir den alten Räuber auf das Äußerste brachten, und ihm alle Mittel zur Besserung, so spät und erzwungen sie auch war, benahmen!“ [14]
>
> すると羊飼いのうちでもっとも賢い男がこう言った。「老いぼれ盗人をひどい目にあわせてしまって、こんなに遅く、強制して、オオカミからあらゆる改悛の手段を奪ってしまったのは間違いだったよ。」

結末に羊飼いの中の利口な男が、オオカミにも改悛の機会を与えなかったことを悔いる箇所があり、教訓性をモットーとする啓蒙の寓話らしい。

レッシングの寓話でも動物の順位争いが問題となる。（Ⅲ，7-10）集まった動物の間で決着がつかなかった時、彼らは人間を裁判官に迎えて順位をつけてもらおうとする。人間にとって自分達動物がどれくらい役に立っているかが、判定の基準になる。しかしながら、百獣の王ライオンは、人間の役にたたぬことが基準ならば、自分はロバ以下の評価を受けてしまうと悟って反対に回る。モグラ、ハムスター、ハリネズミもこれに賛同して、結局人間を裁判官に迎えるのはやめにする。サルとロバは一番遅くやってきて、文句を言いだす。動物らは、よくよく考えをめぐらせば、動物の順位争いなどとるに足らない争いであると悟り、人間優位を認めるのも愚かなことだと気づいてこの揉め事も終わりにする。

> Der Löwe fuhr weiter fort: Der Rangstreit, wenn ich es recht überlege, ist ein nichtswürdiger Streit! Haltet mich für den Vornehmsten, oder für den Geringsten; es gilt mir gleich viel.

Genug ich kenne mich! －[15]

ライオンはさらに続けた。「よくよく考えて見れば、順位争いなんてくだらない争いさ！私のことを一番立派だとか、最低だとか思ってもらったところで、私にはどうでもいいことだ。たくさんだ！自分のことは知ってるよ！－」

動物も賢く、必ずしも人間に支配されているばかりではない。

自然の営みを映し出すために、カシワの木やイバラの茂み、菩提樹、花の束等、植物も擬人化される。秋に実を落として森に恵みを与えるカシワの木も、幹の下で実をむさぼるばかりの豚から、時には感謝されたいと願う。（Ⅰ，15）イバラの茂みは、意地や反逆心の象徴になっている。Ⅰ巻に続いて、Ⅲ巻でもカシワの木が描写され、キツネが見上げて、その大きさに改めて驚きの声をあげる。植物自身のつぶやきにも一種の人生訓が与えられている。

水ヘビの話は、残酷な生物界の食物連鎖を浮き彫りにする。（Ⅱ，13）カエルと水ヘビの対話から、前者は後者ににらまれ、まさに飲まれそうな緊迫した瞬間が描写されている。また、オオカミににらまれたロバは、自らのあわれな境遇を訴えて命乞いをしたものの、オオカミから「良心の内に、おまえさんをこの苦しみから解放してやる義務を感じているんだ。（Und ich finde mich in meinem Gewissen verbunden, dich von diesen Schmerzen zu befreien.－）」[16]と言われて、かえって命を落とすはめになる。（Ⅰ，28）それもこれもギリシアの最高神ゼウスのなせる技である。レッシングの寓話では、自らの姿に悩んだり、他の動物に生まれ変わりたいと嘆く生き物達の声も聞こえてくる。馬はもっと格好よい生き物になりたいとゼウスに訴える。ガチョウは新雪が積もった日に、自分もハクチョウになったような錯覚をして、首を伸ばしたり、おごそかに曲げてみたりする。だが、ガチョウがハクチョウの真似をしたところで、笑い物になるだけである。（Ⅰ，14）彼の寓話では詩風、文芸思潮が問題なのであり、模倣や外国文学かぶれは攻撃の対象となる。

Ⅲ　クリスチャン・フェリクス・ヴァイセの動物寓話

ヴァイセの寓話は本来子供向けに創作したもので、簡潔でウィットに富んだ知的なレッシングの寓話とは、擬人化の傾向にも違いが見られる。ライプツィヒの収税吏として仕事の合間に文芸創作活動に励んだとされるヴァイセは、最初は喜劇やジングシュピールを手がけていたが、娘の誕生を契機に、創作の傾向を変えて、動物寓話を含む子供向けの作品を書くようになった。ヴァイセは1776年創刊の雑誌『子供の友』に、自然や動物を題材にした寓話を発表するようになった。24部の雑誌に渡り、326の寓話が紹介された。

この時代の寓話においてそうであったように、ヴァイセにおいても、動物は人間のように振舞い、分別に満ちた言葉を語っている。このような描写を子供は喜び、自然の変化に目を見開くもので

ある。寓話では現実と空想が交錯した世界が展開する。以下において、レッシングの寓話との比較からヴァイセの寓話における擬人化を見てみよう。

ヴァイセの寓話形式はレッシングと比べるとより長く、子供に向けた語りの調子がとられている。動物の語りが直接話法で展開するので、聞き手は話の中へ引き込まれる。例えば人間に近づき過ぎたモグラの寓話がある。目のよく見えぬモグラは、畑で庭師がよくかけていた眼鏡を見つける。モグラの願いは、人間の罠にかからぬようにするために、外の世界すべてを見てみたいということである。ある日、運よくその願いがかなったかのように思われた。[17]

> Indem er sprach und seitwärts sah, rief er entzückt: „Was find' ich da!
> Ha, Klausens Brille selbst, die er gewiß verloren,
> denn heute früh hing sie ihm noch an'n Ohren,
> als er mich dort belauscht, da ich mich kaum bewegte, und jenen Hügel aufgeregt!"
> こうモグラは言って脇を見やると、うっとりして声をあげた。「そこにあるのは何！お、クラウゼンさんの眼鏡じゃないか。きっと落したんだ。だって今朝早くあの人はそれを耳にかけていたからさ。あの人がそこで聞き耳を立てていた時、私はじっと息をひそめていて、あの塚のように心臓はドキドキして高鳴っていたんだから！」

はやる心をおさえて眼鏡をかけて、昼間の太陽をレンズ越しに覗き込むや、モグラにはまぶし過ぎて、炎以外は何も見えない。うろたえるところを、モグラは人間の一撃に見舞われて、息絶えてしまう。ヴァイセにおけるモグラは、人間と対話する余地さえ与えられていない。作者によればこの教訓は、眼鏡をかければ真実が姿を現すが、光が多すぎても単純な真実は見えないのだという。すなわち、少なくとも我々は、暗闇の中にいるようなもので、賢者とは自分は何も知ってはいないことを悟った人のことだというのである。

ヴァイセの動物寓話では、性格描写が色濃くなされている。メンドリとイタチの話では、自らを賢い鳥だと思っているメンドリが、友人と信じて疑わぬイタチに卵の秘密を教えては、繰り返し卵を盗まれてしまう。[18] 不幸から何も学ばぬお人好しと、友を欺く偽善者の関係に、友人選びの教訓が込められている。レッシングにおいても、メンドリが盲目になっても、ひたすら地面を掻くのをやめないという寓話がある。その傍に実はもう一羽の目の見えるメンドリが控えていて、掻き出された土から実をすばやく見つけては食べてしまう。さらにレッシングは、この盲目のメンドリとは、前段階の仕事をするドイツ人を意味しており、後者はそれを利用しているずるいフランス人であると揶揄している。ヴァイセでもレッシングであっても、メンドリとは、勤勉だがお人好しの人間の象徴である。

ヴァイセのサルと守銭奴の話では、守銭奴が机の中にもお金を隠し持ち、それを見つけた飼いザルが暇つぶしのおもちゃとしてお金を窓からばら撒いて騒動が起きる。窓の外には降ってくるお金を求めて、人だかりができる。お金を手元にため込んでも、適切に使うのでなければ、何の役にも立たない。サルにとって、お金は投げさえすれば人間の反応を眺めることができる愉快なおもちゃにしか過ぎない。[19] 筆者は守銭奴とサルとではどちらが賢いのか、幼い読者に問いかけているかのようだ。

魔法の歌をさえずるナイチンゲールに対して、ガチョウは口数が多くて、騒々しく、おしゃべりの象徴である。ニワトリは単純で騒々しい鳥として描かれ、天敵のトビや侵入する獣が猟人によって退治されると、喜びの鳴き声を上げる。だが、もう少し賢いオンドリは、人間が友達であるなどと錯覚してはならぬ、ナイフを研いで待つ料理人からメンドリとて逃げられぬだろうと警告する。[20] ヴァイセの寓話では動物を支配するのは、ギリシアの神々ではなく、身近にいる人間である。

家の中を飛び交うハエも寓話の題材である。ミルクポットの口に留まるハエの群れの中に、向う見ずな若ハエがいた。長老バエの警告を無視して、肝心のミルクの中を泳いで見せようとしたが、溺れ死んでしまう。人間には少量のミルクであってもハエにとっては湖に匹敵する。ここで言われているヴァイセの教訓とは、大人の警告に耳を貸さないと、子供達は危険な目に遭うという忠告である。

„Wir wissens schon, daß Alte furchtsam sind.
Auf die Gefahr wollt ichs wohl wagen.
(...)
Laßt sehn, ich wage mich hinein!
Wer Herz hat, folget mir! Es wird ihn nicht gereun.“ [21]
「知ってるよ、年寄りは臆病だってね。
私は危険をあえて冒したいんだ。
（中略）
見ていて。中へ入るよ！
勇気のあるヤツはついてきて！後悔なんかしないさ。」

ヴァイセの寓話は語りの対象が子供中心になっている。話の中心となる動物の心情に焦点を合わそうとする時、ich（私）を多用する直接話法に変わっていく。描写される生き物も、ドイツの普通の市民の家庭で見かけるものが中心である。

結　語

レッシングの寓話では人間が動物を一方的に支配しているわけではない。動物も昆虫も人間の暮らしに自分達が役に立つかどうか、人間界での評判を気にしている。寓話について古代にまで遡って一通り研究したレッシングの場合、古代ギリシアやローマの神々が登場し、動物の傍までおりてくる。ゼウスや詩神、ミネルヴァ、ジュピター、アポロ、フリエ、メルクリウスといった神々である。ウマやヒツジ等、容姿に悩む動物の訴えに耳を傾け、相談にのってくれるのはもっぱら最高神ゼウスである。レッシングは自身の寓話を書くにあたって、古典古代やヨーロッパの寓話の伝統を十分に研究していた。動物の世界を統治するのは神の摂理である。[22] 人間はあくまでも脇役である。襲い掛かってきたオオカミは別として、人間はむやみやたらに動物を殺生しているのではない。リチャードソンの寓話では、ヘビは忌み嫌われるが、レッシングにおいてはあてはまらない。描かれる人間も、動物の近くで働く草刈り人、羊飼い、畑仕事や蜂蜜採りに勤しむ農夫、宝の発掘人等である。女性の描写は見あたらない。動物の擬人化もドイツの社会通念を踏襲している。ライオンは百獣の王らしく、キツネはずる賢いが臆病な面を持ち、カラスはずる賢く、すばしこい。ロバは臆病な愚か者。空腹なオオカミは相手の隙を狙うやっかいな嫌われ者。シカは大人しいが、ヒポコンドリー病を訴えることもある。ニワトリは、単純で騒々しい者の比喩である傾向が見られる。

その一方、ヴァイセにおける動物寓話には、ドイツの文芸思潮に対する批評や古典古代の神々の姿はほとんど見られない。農家の中庭にいるような家畜や小動物が好んで取り上げられ、人間も、市民階級の家庭における家族の肖像や近隣の人々の描写に限定されている。「皆で互いについて考え、意向や傾向、風俗習慣や好きな事について不足なく、厳密に区別されている」[23] ことも特徴である。動物に投影されたヴァイセの価値観には、理性を志向する啓蒙主義の道徳観とともに、小市民的価値観も色濃く出ている。それは、官吏を勤めながら、静かな朝と午後になるとライプツィヒのトーマス教会の敷地内にあった一室で静かに書き物をしていた、[24] 手堅く真面目なヴァイセの人生観が投影していたからかもしれない。

レッシングは晩年になるまで定職に就くことがなく、不安定な身分でありながらも自由な立場から文芸批評を続け、疲れを知らぬ論争家でもあった。ギリシアのイソップをはじめとする寓話原典を学び、ヨーロッパの寓話にも遡って研究したレッシングの寓話観は、世俗的な道徳描写を得意とするヴァイセのそれとは対照的に、イソップの原典に近いと言えるだろう。コープマンは、レッシングの寓話について、「市民の時代の寓話であり、その道徳的命題はどこも政治的に解釈されるところがない」と批評している。[25] レッシングは1759年に『寓話』を出版後も、亡くなる1781年まで「イソップ寓話の歴史について」という論考の準備に取り組み続けていたという。[26] 晩年の戯曲『賢者ナータン』（1779）における三つの指輪のたとえ話（Ringparabel）も、寓話が

さらに発展した形ともとらえられる。中期の喜劇断片に残されている小さな寓話エピソードもレッシングの寓話研究の名残りを示している。

注

1 Lessing, Gotthold Ephraim: „Abhandlungen zur Fabel. II. Von dem Gebrauche der Tiere in der Fabel.“ In: Gotthold Ephraim Lessing Werke und Briefe. Gunter E. Grimm (Hg.) Bd. 4. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1997, S. 378.

2 Gottsched, Johann Christoph: „Versuch einer Critischen Dichtkunst: Erster allgemeiner Theil.“ In: Johann Christoph Gottsched Ausgewählte Werke. Joachim Birke u. Brigitte Birke (Hg.) Bd. VI/1. Berlin u. New York: Walter de Gruyter 1973, S. 204.

3 Gottsched: Ebenda. S. 205.

4 Lessing: Ebenda. S. 379–380.

5 Lessing: Ebenda. S. 384–385.

6 Elm, Theo: Diskurse der Macht. Naturrecht und Fabelkasus. In: Fabel und Parabel. Kulturgeschichtliche Prozesse im 18. Jahrhundert. Theo Elm u. Peter Hasubek (Hg.) München: Wilhelm Fink 1994, S. 149.

7 Lessing: Fabeln Erstes Buch, XXX. Aesopus und der Esel. Ebenda. S. 314.

8 Elm: Ebenda. S. 151.

9 Koopmann, Helmut: Lessing: Das Allgemeine im Besonderen. Aufklärung als Denkfigur und Fabeltheorie. In: Fabel und Parabel. Kulturgeschichtliche Prozesse im 18. Jahrhundert. Ebenda. S. 60.

10 Koopmann: Ebenda. 63.

11 Lessing: Fabeln. Erstes Buch, X. Die Grille und die Nachtigall. Ebenda. S. 306.

12 Richardson, Samuel: Äsopische Fabeln mit moralischen Lehren und Betrachtungen. Aus dem Englischen übertragen und mit einer Vorrede von Gotthold Ephraim Lessing. Walter Pape (Hg.) Berlin: Henssel 1987, S. 155–156. レッシングが翻訳したリチャードソンのイソップ寓話については、別の機会に詳しく論じたい。

13 Lessing: Fabeln. Zweites Buch, III. Der Knabe und die Schlange. Ebenda. S. 316.

14 Lessing: Fabeln. Drittes Buch, XXII. Die Geschichte des Alten Wolfs. Ebenda. S. 338.

15 Lessing: Fabeln. Drittes Buch, X. Der Rangstreit der Tiere. Ebenda. S. 332.

16 Lessing: Fabeln. Erstes Buch, XXVIII. Der Esel und der Wolf. Ebenda. S. 313.

17 Anne-Kristin Mai (Hg.): Christian Felix Weiße 1726–1804. Leipziger Literat zwischen Amtshaus, Bühne und Stötteritzer Idyll. Beucha: Sax-Verlag 2003, S. 171.

18　Weiße: Die Henne und der Wiesel. Ebenda. S. 171–173.

19　Weiße: Der Affe und der Geizhals. Ebenda. S. 173.

20　Weiße: Der Hühnergeier, die Hühner und der Haushahn. Ebenda. S. 174–175.

21　Weiße: Eine junge Fliege. Ebenda. S. 176.

22　Fick, Monika: Lessing-Handbuch: Leben-Werk-Wirkung. Stuttgart u. Weimar: Metzler 2000, S 194. フィックによれば、ドイツにおける啓蒙の寓話の「模範的な」様式化は、ゲラートに由来するという。

23　Theodor Brüggemann u. Hans-Heino Ewers (Hg.): Handbuch zur Kinder- und Jugendliteratur. Von 1750 bis 1800. Stuttgart: Metzler 1982, S. 138.

24　Georg Schuppener (Hg.): Germanistische Streifzüge durch Leipzig. Leipzig: Hamouda 2009, S. 46.

25　Koopmann: Ebenda. S. 63.

26　Koopmann: Ebenda. S. 61.

参考文献

一次文献

Gottsched, Johann Christoph: „Versuch einer Critischen Dichtkunst: Erster allgemeiner Theil. “ In: Johann Christoph Gottsched Ausgewählte Werke. Joachim Birke u. Brigitte Birke (Hg.) Bd. VI/1. Berlin u. New York: Walter de Gruyter 1973.

Lessing, Gotthold Ephraim: „Fabeln und Fabelabhandlungen.“ In: Gotthold Ephraim Lessing Werke und Briefe. Gunter E. Grimm (Hg.) Bd. 4. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1997.

Richardson, Samuel: Äsopische Fabeln mit moralischen Lehren und Betrachtungen. Aus dem Englischen übertragen und mit einer Vorrede von Gotthold Ephraim Lessing. Walter Pape (Hg.) Berlin: Henssel 1987.

Anne-Kristin Mai (Hg.): Christian Felix Weiße 1726–1804. Leipziger Literat zwischen Amtshaus, Bühne und Stötteritzer Idyll. Beucha: Sax-Verlag 2003.

二次文献

Elm, Theo: Diskurse der Macht. Naturrecht und Fabelkasus. In: Fabel und Parabel. Kulturgeschichtliche Prozesse im 18. Jahrhundert. Theo Elm u. Peter Hasubek (Hg.) München: Wilhelm Fink 1994.

Fick, Monika: Lessing-Handbuch: Leben-Werk-Wirkung. Stuttgart u. Weimar: Metzler 2000.

La Fontaine, Jean de: Fabeln. (Übertragen von Theodor Etzel) München : Wilhelm Goldmann o. J.

Lessing, Gotthold Ephraim: Fabeln. (ein roher Bogen) Braunschweig: Waisenhaus-Buchdruckerei 1978.

Theodor Brüggemann u. Hans-Heino Ewers (Hg.): Handbuch zur Kinder- und Jugendliteratur. Von 1750 bis 1800. Stuttgart: Metzler 1982.

Reinhard Dithmar (Hg.): Die Fabel. Geschichte·Struktur·Didaktik. (UTB73) (7. Auflage) Paderborn: Schöningh 1988.

_____(Hg.), Fabeln, Parabeln und Gleichnisse. (UTB 1892) Paderborn: Schöningh 1995.

Georg Schuppener (Hg.): Germanistische Streifzüge durch Leipzig. Leipzig: Hamouda 2009.

Dietrich Steinbach (Hg.): Fabel und Parabel mit Materialien. Stuttgart: Ernst Klett Verlag 1982.

Personifikation in den Fabeln der Aufklärung (1)

— Tiere im Vergleich zwischen Lessing und Weiße

Ekiko KOBAYASHI

Äsops Fabeln gelten als Teil der Weltliteratur. Den „Fabeln“ Lessings (1759) liegen die Äsopschen Kurzgeschichten zugrunde. Die Tierwelt der Natur und seine Weltweisheit sind im Kontext der Aufklärung dargestellt. Im Vergleich zu der Übersetzung von Richardsons „Aesop’s fables“ wählte Lessing bestimmte Erzählungen aus, milderte den beißenden satirischen Ton und verstärkte das Moment der Lebensklugheit. Die Fabeln sollten zum Vortrag in der Schule geeignet sein.

Die Tierfabeln in der Zeitschrift „Der Kinderfreund“ von Christian Felix Weiße richten sich ausschließlich an die Kinder. Dadurch bezeichnet man ihn als „Vater der deutschen Kinderliteratur“ in der Neuzeit. „Der Kinderfreund“ war die erste pädagogische Zeitschrift in Deutschland. Bei Weiße werden Tierarten wie Lerche, Henne, Hahn, Gans, Lerche, Kuckuck, Fliege usw. im Bauernhof kleinbürgerlich personifiziert. In seinen Fabeln werden manchmal übertriebene Habgier, Unwissenheit oder sündhafte Lüge mit einem bösen Ende angemahnt: Mit dem Tod der Tiere wirkt der Autor belehrend auf das Empfinden der Kinder ein.

Bei Lessing beherrschen die Menschen nicht einseitig die Tierwelt. Eine Grille bezeichnet die Menschenwelt als die „menschliche Republik“. Tiere und Insekten, wie man sie auf dem Lande in Deutschland findet, bevorzugte der Autor. Er gebrauchte nicht nur reale Lebewesen, sondern auch Tiere aus Legenden oder griechische Mythen wie Phönix, Feen, Bäume wie Eichen, Blumenstrauß u.a. Anders als bei Weiße wird in Lessings Personifikation die scharfe Literaturkritik an den zeitgenössischen Autoren, seine Lebensweisheit oder der Weltlauf deutlicher abgelesen. Die Tiere und die Menschen koexistieren bei den beiden Autoren oft in einer harmonischen Fabelwelt.